

# 「水田漁撈」の提唱

## 新たな漁撈類型の設定に向けて

### A Proposition on the Paddy Field Fishery

## 安室 知

はじめに

#### ①漁撈類型論のあり方とその問題点

#### ②「農漁民」と「農民漁業」

#### ③水田用水系の意義

#### ④水田漁撈の方法

#### ⑤水田漁撈の対象魚

#### ⑥水田漁撈の意義

#### ⑦水田漁撈の歴史と広がり

おわりに

#### 【論文要旨】

本稿の目的は、日本における水田漁撈の実態を明らかにし、その民俗的・歴史的意義を論じることにある。そして、その上で、新たな漁撈類型として水田漁撈を提唱する。

水田漁撈の場合、その主たる舞台となるのが水田用水系である。従来、内水面漁撈は、湖沼と河川に分類されてきたが、第3の水界として水田用水系は重要な意味を持っている。水田用水系とは、水田・溜池・用水路といった稲作のために作られた人工的水界を指し、その特徴は、稲作活動により1年をサイクルとして水流・水量・水温などの水環境が多様に変化することにある。

水田漁撈とは、水田用水系を舞台にして、稲作の諸活動によって引き起こされる水流・水温・水量などの水環境の変化を巧みに利用し、ウケや魚伏籠といった漁具を用いて行う漁である。漁の対象は、水田に高度に適応した生活様式を持つドジョウ・フナ・コイなどの水田魚類である。水田漁撈は、漁獲原理の上で、受動的で小規模な漁撈技術を多用する水田用水期（4～9月）と能動的で比較的大規模な漁撈が行われる水田乾燥期（10～3月）の2期に分けられる。

水田漁撈の民俗的・歴史的意義として、以下の5点を指摘することができる。①自給的生計活動（動物性タンパク質獲得技術）としての重要性、②金銭収入源としての重要性、③水田漁撈が生み出す稲作社会の統合、④水田漁撈の娯楽性、⑤稲作史に与えた影響。

従来、水田漁撈は漁撈技術による類型では「雑漁」とされ、農民が行う取るに足らない生業として扱われてきたが、その裾野は漁業者による漁撈よりもはるかに広いものがある。さらにいうと、水田漁撈は日本にとどまらず東・南アジアの水田稲作圏全域にかかわる問題である。また歴史的にみても、稲作文化と漁撈との関係は根源的なものがうかがわれる。